

昭和52年度 和歌山県文化功労賞

ひら まつ よし ひこ
平 松 義 彦 (号 竈馬)

住 所：和歌山県新宮市

出 身 地：和歌山県

生 年：明治21年

◎業績及び経歴

新宮第二尋常小学校卒業後、木材関係の事業に従事し、少年期から生活の辛酸をなめる。

文学青年であった氏は、上京の際、ふとしたきっかけで俳人高浜虚子の話を聞く機会を得て発奮、境涯の俳句に取り組む。

大正10年「熊野」を創刊主宰、昭和15年「炉話のうしろを走る鼠かな」でホトトギス巻頭、同17年頃かつらぎ第一回同人、同20年ホトトギス同人となり、同25年かつらぎ推薦作家詮衡委員となる。

また、昭和37年から毎日新聞俳句の選者として本県俳壇の振興に貢献するとともに、新宮市にあって後進の指導にあたり、新宮市を中心として有数の俳人が輩出したのも氏の努力に負うところが大きい。

句集には、「熊野路」「友情園」のほか門下の佳吟を集めた「熊野選集」などがある。

主な句に

火を吐ける岩あり山火山火喚ぶ

子に生きてまた孫に生き杉を植う

大滝やはるかに花の廂より

など